

「あいさつ」が人間教育に与える効果
～学級づくり・関係づくりの基礎としてのあいさつ～

The effects of “greetings”
on Humanistic Education

– Greetings as a foundation of classroom
creation & relationship creation –

小 山 雄 将*

要旨：学校教育では、「あいさつ」の大切さが長らく語られ、実践が行われてきている。「あいさつ」は定型句として定型化されることによって日常習慣となりやすい側面があるがゆえに、形だけになってしまうという現象も起こしやすい。ここでは、「あいさつ」のもつ意味や効果を考察し、しっかりとした裏付けに基づいた人間教育としての「あいさつ」を記したい。また、学級づくり・関係づくりの基礎としての「あいさつ」についても考えることにより、所属感や自己受容を高めることで、多様な人々が共存する社会を生き抜く力につなげたい。

キーワード：人間教育 あいさつ 学級づくり 関係づくり 生きる力

1. あいさつの意義

1-1. あいさつの語源・歴史

あいさつの語源は仏教・禅宗にあるとされている。禅問答において、一方が相手の力量を測るための積極的な攻め込み、突き進む「挨」があり、

*奈良学園大学人間教育学部4年生（執筆当時）

すかさず切り返すし、切り込む「挨拶」があって相手の境地、力量を見定めあう丁々発止のやり取りの様子をあわせた言葉である。一挨拶とは正にこのことである。一方が言葉を投げかけて、その反応から相手の禅僧としての値踏みをするわけで、決して油断はできない。そんな切羽詰まったような状況の中で相手に気を向け、また向けさせて心を測り、心を通わせる手段として今日一般的に交わす挨拶となったといわれる。「挨拶」は人と人とのコミュニケーションの基本であって、人種は違って、また大人も子どももすべての人になくなくてはならない心の潤滑油なのである。

我的世界と我々の世界をつなぐ役割として「あいさつ」が作用しているとも考えられる。人は一人では生きていくことはできない。「一挨拶」の精神も、それらの他者と自分の関係性に基づいて述べられているのである。禅宗で一挨拶が記されているのは、宋代（1125年）に書かれた「碧巖録（へきがんろく）」という典籍である。それから892年経った現代の我々は、前述したような一挨拶という元々の意味を知って「あいさつ」をしているだろうか。学校教育で「あいさつ」指導する際、併せてこれらの事柄についても児童・生徒に前提として指導していく必要があるのではないだろうか。語源や由来、場面状況における意義を知って行う「あいさつ」と、機械的・形式的・義務的に行う「あいさつ」とでは大きな違いがある。

1-2. 一般企業の「あいさつ」に関する取り組み

学校教育は、児童・生徒が一社会人として生活する術を教え、育む場所であると考えている。学校で行なわれている「あいさつ」に関する指導が、その後の社会生活でどのように生かされているのだろうか。

私が以前勤務していた東京ディズニーリゾートでは、ゲスト（お客様）に魔法をかけるツールとして挨拶を利用している。これは、身近に感じ、昔からの知人・友人のように感じ取ってもらい、くつろいでもらうことを意識しているのである。東京ディズニーリゾートでは、入社後すぐの研修

でキャスト（スタッフ）が守るべき行動指針として「SCSE」というものを習う。これは、大切な順番に並んでおり、「Safety（安全か?）」「Courtesy（礼儀正しいか?）」「Show（ショーマンシップとして良いか?）」「Efficiency（効率的か?）」となる。東京ディズニーリゾートでは、安全性の次に礼儀正しさが重要視されている。これは、「相手を大切に想う心を表現するためである」とされている。前述したように、東京ディズニーリゾートでは、身近に感じ、昔からの知人・友人のように感じ取ってもらい、くつろいでもらうことを大切にしている表れである。人間関係を上手く構築する上で、「あいさつ」を始めとする礼儀正しさが大きな役割を果たすと考えられている。



図1

また、ANAにおいては「挨拶のわずかな時間で、相手の情報を得る」・「挨拶はミスを防ぐ」という社員同士の関係性における活用や、「基本でありながら、挨拶は『おもてなし』をする上での強力なコミュニケーションツール」といったお客様との関係性における活用も行われている。ANAビジネスソリューション（2015）には、「あいさつは気づかひの最も基本となるものです。人と人との良好な関係は、あいさつから始まるといえます。基本でありながら、あいさつは『おもてなし』をする上での強力なコミュニケーションツールにもなります。なぜなら、どんな人に対しても、あいさつをすることができるからです。どんな目上の人であっても、あいさつすることが失礼にあたるということはまずありません。そして、あいさつを相手とのさらなる会話にきっかけにすることもできます。」とある。これは、ANAにおいて、「あいさつ」が社員と社員、社員とお客様を繋ぐ大切なツールとして扱われていることがわかる。

これらのように、東京ディズニーリゾートにおいても、ANAにおいても、「あいさつ」が人と人とを繋ぐツールとして、または、そのきっかけとして有効であり、大切であるとの認識のもとで社員に教育を行っている。学校教育のみでなく、会社組織においても社員－社員、社員－お客様の「あいさつ」が大切に扱われていることが理解できる。

1-3. なぜ「あいさつ」は必要なのか

私が小学生だった頃にもあいさつ運動は行われていた。内容は、朝校門に教職員が立ち、児童が登校してきた際に「おはようございます。」と声をかけ、児童が「おはようございます。」と返答するというものであった。その中で、あいさつを返さない児童というものが出ていた。その際の教職員の対応は、「はーい、やり直しー。」というものであった。私は、今考えるとこの光景に非常に違和感を感じる。あいさつは自動応答サービスではない。教職員の「はーい、やり直しー。」という発言は、子どもの中における「あいさつの価値」を無視した自動応答サービスを求めるものに他ならない。また、「あいさつ」の押し売りをしてしまうと、思春期を迎えた児童はその時点で反発し、一切「あいさつ」をしなくなるといった逆の効果も考えられる。子どもたちには、普段の学級での活動や道徳の授業などを通して、あいさつの意義や必要性についての「なぜ？」を考えさせていかななくてはいけないのではないだろうか。前述したような極端な例でなくとも、児童・生徒が「あいさつ」の意味や意義について知らないまま、無意識にパターン化された行動としての「あいさつ」をしているという場面も多く見られる。

小学校学習指導要領総則には、「道徳教育を進めるに当たっては、教師と児童及び児童相互の人間関係を深めるとともに、児童が自己の生き方についての考えを深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内

面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。その際、特に児童が基本的な生活習慣、社会生活上のきまりを身に付け、善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないようにすることなどに配慮しなければならない。」とある。

人間関係を深めることの第一歩として、きっかけとなる「あいさつ」について指導していくことが、児童・生徒の心身の健康な発達に繋がり、必要であると言える。この場合の「あいさつ」と交感的言語使用の「あいさつ」とは区別しなければならない。交感的言語使用とは、話し手と聞き手の間に一体感が生まれるような社会的機能をもつ話しことばで、特に伝達機能を持たない単なるおしゃべり（small talk）に相当するものを指す。「おでかけですか」「いいお天気ですね」といった一言声をかけるような挨拶や天気の話、うわさ話など雑談することで連帯感が話し手と聞き手の間に生まれ、人間関係を確立したり、円滑にしたり、維持したりするための機能を果たしている。これらの交感的言語使用は、人と人とのクッションとしての役割として利用され、その言葉の意味を考えながら発される「あいさつ」とははっきりと区別されていくのではないだろうか。

2. あいさつの効果

2-1. 承認欲求（他者承認）としての「あいさつ」

中村（2010）は、「一対一における〈自己形成—他者承認〉という関係的出来事とおして、直接的な共同体のなかに価値転換が起こることが、社会における新たな承認文化の形成の起点となる。」とある。確かに、挨拶をすることによって、帰属意識や集団意識を感じさせるという意図もあるのではないだろうか。また、その意識を持たせることによって、「あなたは必要な特別な人なのだよ」ということを伝えることもできる。そうすることにより、自己肯定感も身につけることが可能なのではないだろうか。また、野田（1989）は、「アドラーは共同体感覚について三つのことを言っ

ています。まず第一には、「私は共同体の一員だ」という感覚。「所属感」といってもいいでしょうね。第二には、「共同体は私にために役に立ってくれるんだ」という感覚。「安全感」とか「信頼感」と言えば近いかな。第三に、「私は共同体のために役立つことができる」という感覚。「貢献感」とも言えればいいかな。」と述べている。このことから、人間が人間であるために、所属感等が大変重要であるということが理解できよう。

マズローの欲求階層論によれば、第一階層の「生理的欲求」は、生きていくための基本的・本能的な欲求（食べたい、飲みたい、寝たいなど）。この欲求がある程度満たされると次の階層「安全欲求」を求めようになる。第二階層の「安全欲求」には、危機を回避したい、安全・安心な暮らしがしたい（雨風をしのぐ家・健康など）という欲求が含まれる。この「安全欲求」が満たされると、次の階層である「所属欲求（社会的欲求）」（集団に属したり、仲間が欲しくなったり）を求めようになる。この欲求が満たされない時、人は孤独感や社会的不安を感じやすくなると言われる。ここまでの欲求は、外的に満たされたいという思いから出てくる欲求（低次の欲求）で、これ以降は内的な心を満たしたいという欲求（高次の欲求）に変わる。「所属欲求」の次に芽生える欲求は、第四階層である「承認欲求」（他者から認められたい、尊敬されたい）である。そしてその「尊厳欲求」が満たされると、最後に「自己実現欲求」（自分の能力を引き出し創造的活動がしたいなど）が生まれるとされている。マズローの承認欲求論でいうと、「あいさつ」は第三階層・第四階層であると言える。

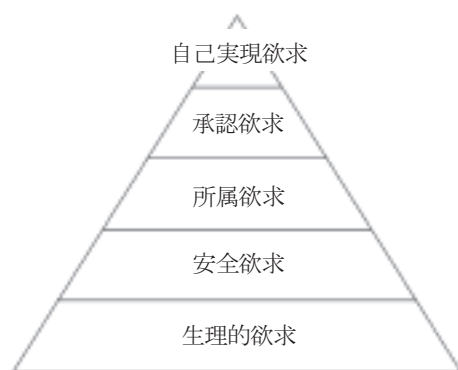


図2

一般的に、人間は社会の中で一人きりで生きていくことはできない。生きていく上で、様々な社会・集団の中での承認欲求を満たすといった意味合いにおいても、「あいさつ」は大きな意義を持つ。子どもたちを取り巻く家庭や地域社会が様々な教育上の課題を抱えている現在、「あいさつ」の持つ教育的価値を生かした様々な取組への期待は高まる。学校教育における学級づくり・関係づくりにおける「あいさつ」の持つ価値に着目したい。

2-2. 学校教育における道徳性

我が国における道徳教育は、変革の時を迎えている。具体的には平成30年4月より小学校において「特別の教科 道徳」がスタートし、授業内での取り組みについても大きく変わろうとしている。私は、学校教育の根幹は道徳教育であると考えている。道徳教育＝人間教育であると言えるのではないだろうか。（人間教育とは、梶田（2016）で『人間教育』とは、何よりもまず『人間』という名に値する高次の在り方を目指す教育であり、教育基本法の第1条の冒頭に規定されている『教育は人格の完成を目指し』という文言に対応するものということになる。』と定義されている。）今般、学校教育には「生きる力」が求められている。（文部科学省においても、折に触れ様々な通知等でこの言葉の大切さが述べられている。）

その「生きる力」を支えるものは何なのだろうか。それは、「道徳性」や「規範性」といった言葉で表される。平成26年10月21日に中央教育審議会が出した「道徳に係る教育課程の改善等について」の答申では、「道徳教育の目標は簡潔な表現に改め、「特別の教科 道徳」（仮称）の目標は、判断力、道徳的心情、道徳的行為を行う意欲や態度を育てることなどを通じて、よりよく生きていくための資質・能力を培うことと。」とある。この中の「道徳的心情、道徳的行為を行う意欲や態度を育てることなどを通じて、よりよく生きていくための資質・能力」とは、どのようにして身につ

けさせていけば良いのだろうか。

我々人間は、誰しもが「我的世界」と「我々の世界」を持ち合わせている。「我的世界」とは、自分の内面世界のこと、無意識世界の自分であるとも言える。「我々の世界」とは、普段社会で生活を送っている時の自分



図3

である。これは、自分の本心の世界ではなく、社会を生きていくために順応しなくてはならないという適応した自分のことである。「我的世界」と「我々の世界」について梶田（2014）は、講演の中で「若い人の心を育む」ということの基本的な考え方について話したい。何を具体的に育むのか。1つは世の中できちっとやっていくために必要な育ち、もう一つは自分の人生をどう生きていくか、のために必要な育ち、この2つだ。これを「我々の世界」を生きる力と、「我的世界」を生きる力と、言うことにする。」と述べている。人間は社会生活を行っていく上で、様々な「仮面」を付け替えることにより生活を送っている。（例えば、職場では部長、家庭では夫・父というように。）この「我的世界」と「我々の世界」の住み分けは、道徳性や規範性が大きく関係しているのである。

この住み分けは、何も大人だけが持っているわけではない。子どもも子どもの世界の中で「我的世界」と「我々の世界」を持って生活を送っている。（例えば、仲間と遊ぶ時に自分のしたい遊びと友達のしたい遊びが違った場合に、折衝案を提示するという妥協を行なう。これは、事象を「我々の世界」的に捉えているからに他ならない。）学校教育では、これらの社会を生きていくために必要な「我的世界」と「我々の世界」について、道徳をはじめとする学校生活全般において指導していく必要があると言える。その指導が、実際に社会に出た時に必要となってくる。

2-3. 人間教育と道徳性

人間教育と道徳性はどのように関係しているのだろうか。人間教育を英語で表記すると“Humanistic Education”となる。なぜ、“Human”ではなく“Humanistic”と表されるのだろうか。“Humanistic”を日本語に訳すと、「人間的な」となる。この点から考えると、人間教育とは、「人間的な教育を行うための学問」と言うことができるのではないだろうか。さらに言うならば、人間が本質的に持ち合わせているはずである様々な権利を尊重しながら、社会の中で生き抜くための教育ということなのである。では、道徳性とは具体的にはどのようなことなのだろうか。文部科学省では道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度と定義している。他者と関わり生きていくためには、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度が必要不可欠であることは明白だ。もし、これらが欠如した場合、社会が成り立っていくことが可能であろうか。成り立っていくことが難しいということは、容易に想像できよう。略奪・殺人・放火など、非日常が日常になってしまうのではないだろうか。このように、人間教育と道徳性は切っても切り離せない関係があるのである。

新年度、どの学校現場においても新たな学級づくりがスタートする。特に、新入学年やクラス替え後の学級づくりは、最初の取り組みが重要とってくる。学級づくり・関係づくりの取りかかりを間違えてしまうと、いじめ問題や学級崩壊と言った人間関係に起因する問題へと繋がってしまうのである。その他にも、連休明けや長期休暇明けなど、児童・生徒が学校における生活リズムからかけはなれてしまっている状態が予想される。「あいさつ」には、そういった場合における学びのための指導をするために「切り替えさせる」という効果も期待できるのではないだろうか。

実際の教育現場では長期休暇明けに、児童・生徒の生活リズムを長期休暇前の状態まで持っていく難儀さが数多く聞かれる。その他にも、様々な場面における「あいさつ」を用いた指導は様々な効果が期待できるのでは

ないだろうか。文部科学省では、平成18年2月の中央教育審議会 初等中等教育分科会教育課程部会審議経過報告で、学習や生活の基盤として「言葉」を重視し、すべての教育活動を通じて国語力を育成することを求めている。「あいさつ」は言葉として定型化されることによって、人間関係の良好化に寄与する。コミュニケーションへの入り口となり、より深い人間関係構築への可能性を高める。学級づくり・関係づくりにおける「言葉」を重視した取り組みとして、「あいさつ」に関する取り組みから始め、それをきっかけとして人間関係を構築し、活動内容を徐々に他の教科・活動へ、また活動の範囲を学校や地域へと広げていくことによってより深い学びに取り組むことのできる学級へと成長していくのではないだろうか。また、そのことが「道徳的心情、道徳的行為を行う意欲や態度を育てることなどを通じて、よりよく生きていくための資質・能力」になり、社会を生き抜く力へと繋がっていく。

3. 人間教育とあいさつ

3-1. 「あいさつ」と「我々の世界」

人間教育とは2-2と2-3でも述べたが、人が人たるための教育（“Humanistic Education”）である。これは、複雑な社会を生きていく上で、「我的世界」と「我々の世界」を上手に生き抜く力をしっかりと付けさせる教育となる。要は、人は「我的世界」だけでも「我々の世界」だけでもなく、その両輪を揃えなくては上手く生きていくことはできないということなのである。これらの両方を身につけることにより、教育基本法第1条に述べられている「人格の完成」へと繋がっていくのである。

ここまで様々な視点から述べてきた「あいさつ」は、「我的世界」と「我々の世界」を上手に橋渡しする存在にもなるのではないだろうか。具体的には、「我的世界」にいた自分が、「我々の世界」に出て行く際、他者との関わりが想定されよう。そのような時の切り替えの作用としての「あ

いさつ」が存在するのではないか。これは、内面世界から外の世界への切り替えとしての効果である。人間教育では、人が社会にでて生き抜く力を身につけさせるということが大きな目的に挙げられる。「あいさつ」という他者と関わる際のきっかけ等として大切な事柄を身につけることにより、様々な人とより良い関係性を築くことができるという実社会で生きていくことに有用な作用が期待される。

例えば、「おはようございます。」というあいさつに、心の中で一言プラスしてみる。「おはようございます。」+（心の中）「今日も天気が良くてよかったですね。」のように。そうすると、不思議とあいさつに気持ちもこもってくるのである。人間教育では、これらのように「あいさつ」の意味や作用も含めた指導を通して人と関わっていく力（「我々の世界」を生き抜いていく力）が社会生活の中で大きな効果を上げるのではないだろうか。人間教育は、社会を生きていく上で大きな意味を持つと言える。

子ども達が生きてきた中で最初に直面する集団は、学級である場合が多い。（幼稚園・保育所・子ども園は自由度が高いため除外して考察する。）学級では、同じ時間に同じ場所で同じ学習を行うことが求められる。それだけ多くの時間をその集団で過ごすのである。そこでは、「我々の世界」として人間関係が構築されていく。より良い人間関係や集団意識、所属感をもたらすためには、意味や効果を含んだ「あいさつ」を通した活動・指導を行って、自己受容を高めていくことが大変有用となってくる。

3-2. 「あいさつ」指導の事例と効果

3-2-1. 「あいさつ」指導の事例と効果1

文部科学省・言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】には、「よりよい生活や人間関係を築くためには、自分や他者の思いや考えを共通又は協働の目的のもとに整理して、互いに理解し合うといったコミュニケーションが重要である。しかし、近年、自分や他者の思いや考えを表現した

り受け止めたりする語彙力や表現力が乏しいことにより、他者と適切な関係がとれなくなったり、容易に「キレて」しまったりする児童生徒が見られるとの指摘がある。

良好なコミュニケーションを図るためには、思いや考えを表現するための語彙を豊かにし、表現力を身に付けることが重要である。また、自分の思いや考えをもちつつそれを相手に伝えようとするとともに、相手の思いや考えを理解し、尊重しようとすることも大切である。その上で、自分と相手の思いや考えについて、「何が同じ」で「何が異なるか」という視点で整理しながら、相手の話をしっかり聞き取り、受け止めるようにするとともに、納得したり、合意したり、折り合いを付けたりするなど、状況に応じて的確に反応することができるようにすることも大切である。」と記述されている。これより、人間関係構築のためのコミュニケーションが求められていることがわかる。

福岡県の北九州市教育委員会では、「北九州市子どもの未来をひらく教育プラン」の中で「あいさつできる子日本一」を提示し、学校・家庭・地域が協力してあいさつ運動を展開している。その活動の報告として「平成27年度あいさつ運動優秀実践校事例集」を取りまとめている。これは、各学校において行われた「あいさつ」に関する具体的な取り組み内容とその効果についてまとめられている。その中に挙げられている取り組みの一例を資料1に示した。

資料1

- ・学校生活での約束を守る取組み「あしへそはいじ運動」（「あいさつ・しせい・へんじ・そうじ・はきものそろえ・いすいれ・じかんをまもる」の頭文字を取った名称）の中でもあいさつを特に重視し、児童全員と教職員が週1回以上あいさつ運動を実施している。
- ・あいさつ運動を学校の重点目標に位置づけ、全学年において各学期

1回、道徳の時間に「気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心がけて、明るく接する」ことを指導した。

- ・10月に「あいさつ運動オーディション」を行い、委員会のメンバー以外もあいさつ運動に参加したい児童をつのり、「あいさつ隊」を結成した。「あいさつ隊」には隊員証を渡し、毎回のあいさつ運動に参加している。

多様な視点から「あいさつ」が取り組まれており、その成果が期待されていることがわかる。また、取り組みによって得られた効果については、資料2のように報告されている。

資料2

- ・継続的な指導の結果、自発的に笑顔であいさつができる子どもが増えてきた。そのことにより、児童同士、児童 教師間の人間関係も良くなってきている。今後もあいさつ運動を継続していくことで、全体のレベルアップを図っていきたい。
- ・教職員や来校者、スクールヘルパー、地域の方々へのあいさつがかなり定着してきたのは日々のあいさつ運動の積み重ねの成果であると考えている。また、あいさつが子どもたちの心の育成や落ち着いた生活のきっかけ、ひいては児童同士の良好な人間関係にもつながっていると感じる。
- ・運動が展開するにつれて、目を合わせ、口を開いてあいさつできる生徒の数が増え、来校者からも感心の言葉が寄せられるようになった。また、声を出してあいさつすることを褒められた経験から、様々な行事でも必要な声を出せるようになり、積極的な行事への参加姿勢につながっている。更に、正しい行いに自信が持てるようになった。

たためか、困っている人に対して積極的に手助けできる生徒が増えるなどの変化も見られるようになってきている。

様々な方法によって取り組まれた「あいさつ」は、人間関係の向上や学習規律の醸成、道徳性や規範性の醸成などにつながっている。特に人間関係の構築・向上については、いじめ問題等の現代教育課題の解決策を模索する際の有効な視座ともなり得るだろう。様々な角度から「あいさつ」に関する取り組みを展開することによる有効性は幅広いものである。

3-2-2. 「あいさつ」指導の事例と効果2

「あいさつ」に関する指導を行う際に留意しなくてはいけないことがある。それは、緘黙等を抱える児童への対応である。緘黙がある児童に対して無理やりにあいさつ運動への参加をさせようとする、さらに症状が進んでしまうことが考えられる。

小島(2013)では、選択性緘黙の児童に対する「あいさつ」指導の方策としてコミュニケーションカードの利用を行なっている。コミュニケーションカードは、あいさつやお礼等の日常会話をカード化したものを見せると言ったものである。これらの指導を試みたところ、対象の児童は徐々にクラスメイトとひそひそ話をするなど、感情表現に発話を用いることができるようになってきたのである。

以上の状況より、小島(2013)では社会的妥当性について「A児の表情やコミュニケーションモードの変化、コミュニケーションカードの有効性、教師の負担、級友のかかわり方の変化について、4人の教師全員から肯定的な評価を得られた。さらに、保護者からもコミュニケーションカードの使用に対して肯定的な評価を得られた。これらのことから、A児に対するコミュニケーションカードを用いた指導は、指導方法および効果の点において妥当であったといえる。」としている。

「あいさつ」に関する指導を展開する際に、この方法を利用すれば効果が期待出来るとともに、一緒に取り組みを行うことができると考える。また、できないと思っていたことを一緒に取り組むことができたという所属感や承認感も感じることができ、アイデンティティーの構築にも役立つのではないだろうか。多様性を認め合う、より良い人間関係を築くといった望ましい効果も期待できるだろう。

4. 今後について

今回、この論文を進めていくにつれて、事例集がまとめられるなどされており、学校教育と「あいさつ」には関わりが深いということが確認できた。しかし、その指導方法や意義付けについては未だ確立しておらず、学校行事のようにあいさつ運動が行われていたり、形が重視された「あいさつ」が溢れているように感じられた。

今後は、どのように「あいさつ」を指導していくことが子どもの生きる力に繋がっていくのかについて、さらに調査・考察を進めたい。その際、あいさつ指導の多くの事例から、うまくいっている指導事例の共通点を考察し、指導のポイントなどを提案していきたいと考えている。

引用・参考文献

- 1 新教科「道徳」の倫理と実践(玉川大学出版社、渡邊満ほか)
- 2 ディズニーランドが大切にする「コンセプト教育」の魔法 ゲストにもキャストにも笑顔が溢れる瞬間(こう書房、生井俊)
- 3 仕事も人間関係もうまくいくANAの気づかい(KADOKAWA、ANA ビジネスソリューション)
- 4 日本再生と道徳教育(公益財団法人モロラジー研究所、梶田一ほか)
- 5 道徳と特別活動2017.3月号(株式会社文溪堂、文溪堂編集部)
- 6 児童心理2017.4月号臨時増刊(金子書房、深谷和子ほか)

- 7 埼玉大学紀要 教育学部, 59(1): 67-80(2010)(埼玉大学、中村麻由子ほか)
- 8 小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 (文部科学省)
- 9 小学校学習指導要領総則編 (文部科学省)
- 10 よっぼどの縁ですね (小学館、大谷徹煇)
- 11 改訂版教育心理学入門 (小林出版、豊田弘司)
- 12 人間教育のために (金子書房、梶田叡一)
- 13 アドラー心理学トーキングセミナー (アニマ2001、野田俊作)
- 14 ころを育む総合フォーラム第33回ブラックファスト・ミーティング (有識者会議) 基調報告より (梶田叡一)
- 15 現代語訳 碧巖録〈上〉 (岩波書店、末木文美士)
- 16 現代語訳 碧巖録〈中〉 (岩波書店、末木文美士)
- 17 現代語訳 碧巖録〈下〉 (岩波書店、末木文美士)
- 18 学習指導要領「生きる力」言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】 (文部科学省)
- 19 「平成27年度あいさつ運動優秀実践校事例集」 (北九州市教育委員会)
- 20 特殊教育学研究 51(4), 359-368, 2013 (日本特殊教育学会、小島拓也ほか)